

# 日欧比較景観論

## On Landscapes in Europe and Japan

山田利一

Toshikazu Yamada

### Abstract

The difference in landscapes between Japan and Europe shows the different views of nature in modern history. Having learned the value of fresh air, clean water and the sun through the Industrial Revolution, European governments were active in restoring and protecting the natural environment to keep people healthy. They passed a variety of laws that made tens of millions of city dwellers feel comfortable with living in apartments and helped stop cities from sprawling. In contrast, Japanese scenes represent inadequate city policies worked out by generations of governments since the beginning of modernization in 1870's. Their primary concern was to enrich the nation and build up the military; providing people with good living conditions and preserving nature were not their earnest business. The former was regarded as a private matter which everyone should resolve one way or another, and the latter the least important issue. In consequence of such laissez faire, Japan failed to have modern cities with an appealing exterior and an extensive, woody residential area surrounding them.

### 序

日欧異文化間コミュニケーションの一領域として、日本と（イギリスをふくむ）ヨーロッパの景観の比較を行い、その背景にある思想を探ってみたい。一般にカルチャーショックと呼ばれている現象は、異文化に対する心理的、肉体的な拒絶反応を指すが、それは人間や社会（価値観や生活習慣）に対してと同様、風景（景観）に対しても生じるように思われる。ロンドンに暮らした漱石が精神をすっかり病んでしまったという故事がある。誰にとっても異国での人間関係は煩わしいものだが、これにくわえて「紙と木」でできた平坦な日本の町並に育った神経過敏な文人にとって、石とレンガで築かれた堅牢で重厚、かつ長大な建築がそびえ立つ「霧の都」の景観は大きな心理的負担になった可能性がある。漱石は遠い異郷の地で、あたかもひとり独房に閉じ込められたかのような息苦しさや孤独感に苛まれたに違いない。風景は雄弁である。以下に、心情に大きな影響を及ぼす日本とヨーロッパの景観の違いを具体的に論じ、その背景にある思想や都市政策の違いを明らかにしてみたい。

ところで日本でもそうであるが、ヨーロッパでも東西南北で風土・文化が大きく異なり、ヨーロッパの「顔」は多様である。そこで以下の論考においては、具体的な地名を言及する場合を除いて、ヨーロッパの村や町、都市を理念化、抽象化して議論することにしたい。同じことは日本についても言える。たとえば北海道は亜寒帯、沖縄は亜熱帯に属するため、本州・九州・四国とは自然景観が異なる。また歴史的経緯も異なり、都市景観も異なる。しかし今後の議論では、このような性格の違いを踏まえうえて、具体的な地名に言及することを例外として、日本の一般的、理念的な自然景観・都市景観というものを想定し、それを議論の対象とすることにしたい。

### 第1章 都市に関する認識の違い

以下に日欧間の様々な景観の違いを論じるにあたり、まず「村」、「町」、そして「都市」の概念を明確にしておきたい。というのは、これらの語が示すものには日欧間でかなりの隔りがあるからである。

まず、日本ではこれらが人口の差異として認識されるのに対して、ヨーロッパでは、人口や建築物の数を無視するものではないにせよ、人口の違いが日本ほど重要視されていない。たとえば、国語辞典（『岩波国語辞典第五版』）でそれぞれの定義を参照してみると、「村」は「いなかで、人家が群がっている、地域的なまとまり」、「町」は「家が多く集まって建っている所」、「都市」は「人が多く集まり、政治・経済・文化の中心になっている所」である。ちなみに『集英社国語辞典』の「町」の定義は「人が多く集まり、家が多く建っている所」である。人家の数もさることながら、日本では村、町、市の「発展プロセス」には人口が大きく関わっていると信じられているようだ。集英社版の「町」でも岩波版の「都市」でも、ともに「人が多く集まり」が「町」と「都

市」を決定づける重要要件となっている。

他方、英語には偶然 *village*、*town*、*city* と日本語に対応する言葉があるが、これらの語は日本語の場合とは異なり、きわめて恣意的、感覚的に使用されている。古い例だがひとつ具体例を示そう。大森貝塚の発見者エドワード・モースは1878年の夏、西欧的な街づくりがなされていた札幌を訪問した。彼は「札幌の町通りは広くて、各々直角に交わっている」と日記に記載したが、同時に、「全体の感が我が国の西部諸州に於ける、新しい、しかし景気のいい村である」とも記録した。彼にとっては *town* も *village* も取り立てて区別するものではなかったようだ。<sup>1</sup> *Town* と *village* が同じなら、*town* と *city* も同じように扱われる。ニューヨーク市のような大都会も“*abigtown*”と称されることがしばしばあり、英語話者にとって、これらの語の違いは大同小異に過ぎず、その使用はきわめて恣意的、感覚的になされているようだ。

ニュアンスは異なるがフランス人もまた「村」、「町」、「都市」に無頓着という点では英米人と肩を並べる。フランス語は英語とは異なり、村を意味する *village* と、町・市を表現する *ville* の2語しかないが、「・・・フランスの地方自治は、パリ、リヨン、マルセイユのアロンディスマン(区)を除いて、全国が三万六千五百三十八のコミュンヌ(市町村)でできている」<sup>2</sup> ため、フランス人もまた自分が住んでいる土地が、村か町かそれとも市なのかといったことを意識することはほとんどなく、第三者的、客観的な表現として *village* や *ville* を使用することがあっても、自分が居住する土地がそのいずれであるかを疑問に感じることはない。ドイツ語もフランス語同様、村 (*Dorf*) と町・市 (*Stadt*) の区別しかなく、町と市の差異を論じることは不可能である。

次に都市に関して日欧間で認識が異なるのが、都市の「立像」である。ヨーロッパの都市は中世以降、大きな人口を限られた空間に収容するため、高層建築による高密度化を図り、そのシルエットは立体的であった。他方、日本の都市は太古以来ずっと平面的なシルエットを保ってきた。この違いの背景にはもちろん地震の有無がある。地震のない北ヨーロッパでは数百年前から、木造の3~4階建て集合住宅が都市の核となり、平原のかなたからでも都市の存在が容易に認識された。他方、鉄骨・鉄筋を用いた耐震技術が普及した20世紀後半に至るまで、日本人は地震を恐れ、平屋もしくは2階建ての木造住宅しか建設することができず、都市の景観はずっとフラットであった。その名残は今でも健在で、日本の都市はおびただしい数の民家で溢れ、都市景観とは住宅密集地と言い換えることができるほどである。



ラウフェンブルク (スイス連邦外務省提供)



東京都品川区

第3の違いは「都市」の中身の違いだ。日本の自治体も住民も「村」よりは「町」、「町」よりは「市」の方が優れているという思い込みがあるようだ。そのため、村や町は一人でも人口を増やし、5万人のボーダーラインを超え、「市」に昇格することを願っているようだ。2010年の国勢調査の際に愛知県東浦町で起こった人口水増し事件は、町が市に対して抱く憧憬の強さを雄弁に物語っている。他方、住民も自治体関係者も、自治体の「質」に関してはさほど大きな関心を抱いていないようだ。大都会でもそうだが、日本の景観の一大特徴は電柱と電線が存在である。ヨーロッパにおいては、人里ではまず目撃されることのない物体が日本では普遍的な光景となっている。



ドイツの農村



パリの裏通り

## 日欧比較景観論

常に台風や震災の脅威にさらされている国で、自然災害の格好の標的となりうる電柱・電線が露出しているのは危険であると同時に、これらは経済的な貧しさと、民度の低さをも表現している。これにくわえて狭い道路、歩道のない道路、区画未整理による住宅密集状態、下水道の未整備、公園・緑地の不足など、日本の村や町、市の大半は21世紀にいたるもインフラ未整備の状態にあり、<sup>3</sup>それが日欧間の景観の違いのひとつとなっている。

## 第2章 都市と都市との間にあるもの

ヨーロッパでは、都市と都市の間にあるものは田園（畑、牧場、野原、森）である。付言すれば、村と村、町と町の間にあるのも田園である。つまりヨーロッパ人は、田園（自然景観）の中に島のように所在する村や都市の中で生活しているのである。都市と自然とのコントラスト、これがヨーロッパの景観の一大特徴である。ではなぜヨーロッパではかくも自然が豊かなのであろうか。それはスプロールを防止し、都市の市域が限られているからである。たとえばパリ市内の面積は87km<sup>2</sup>（東京の山手線内63km<sup>2</sup>）しかなく、市街地は半径15キロの円内に収まっている。ゆえに市内の主要駅から電車に乗れば、数分で緑豊かな



パリ北駅発15分後の景色



東京駅発20分後の景色（横浜市）

郊外住宅地に達し、10分もすれば畑と森が広がる田園地帯に入る。ロンドンでも事情は同じである。大ロンドン市の面積は1,579km<sup>2</sup>と広大であるが、その大半は郊外住宅地である。そして中心から半径20キロ圏外は緑豊かな田園地帯となる。したがってパリと同様、郊外に向かってロンドンの主要駅を出発すれば、列車はものの10分で緑豊かな田園地帯を走ることになる。

以上とは対照的に、日本の都市と都市の間にあるものは市街地である。厳密に言えば、北海道や東北地方においては都市と都市の間には山や広大な農地が広がっているが、東京、名古屋、大阪の三大都市圏、そして瀬戸内沿岸は、広大な市街地となっており、都市と都市の間もまた都市という状態である。その典型が東海道新幹線の沿線であろう。東京—新大阪間で田園風景が展開するのは山間部のみで、平地ではほとんど皆無である。神奈川県西部、静岡県、愛知県東部の平野に耕作地が見えるが、それらは市街地の中に点在する畑や水田であって、ヨーロッパの平野に見られる水平線まで達する耕地とは様相が大きく異なる。



神奈川県平塚市



静岡県富士市

新幹線がハードもソフトも世界一であることは確かだが、その車窓に映る景色はほとんど景色の名に値しない殺風景な無限市街地である。ちなみに一般に、東海道新幹線沿線で最高の景色と信じられているのは富士山だが、車窓に映るのは富士山だけではない。間近に見えるのはおびただしい数の工場と煙突、そこから吐き出される白煙、そして大小さまざまな建築と派手な看板である。富士山はそれら雑多で無粋な建築物の「背景」に過ぎないのである。

## 第3章 村の景観比較

ヨーロッパの村の特徴はまず、上で言及したように、広大な畑や森がつくる「緑の海」の中の「島」として存在していることで

ある。次いで、常識的には、そこには教会と複数の商店、数十戸の民家がある。イギリスの辞典 (*Longman Dictionary of Contemporary English, New Edition, 1987*) は教会と学校、パブ (PUB) を村の主要構成要素として挙げている。また教会は村の中心に位置し、そびえ立ち、村のランドマークとしての役目を務めている。第3に、教会を含めすべての建築が道路に接している。そして多くの場合、二階建ての民家は棟続きで、統一景観を構成している。第4に、原則的にはほとんどすべての建築が建材を共有し、同一様式で建てられ、屋根瓦や壁面の色を共有している。したがって村全体がひとつの構造体となり、安定感や落ち着きを表現していると同時に、周囲の自然景観と見事な調和、もしくは美しいコントラストを示している。

日本の農村風景はこれとはまったく対照的である。まず、自然の中に「島」の状態で所在している村 (集落) は山間部を除けばあまりない。かりにそのような形状の村があるとしても、「島」からはみ出して立地する民家が多く、山間部でもミニスプロールが一般的である。第二に、日本の村にはヨーロッパの村における教会のような核がなく、民家 (農家) のみが雑然と立ち並ぶ景観を示している。第3に、道路に沿って横広がり集落が形成される傾向が強い。そして道路に面した民家の背後に別の民家、その背後に別の民家が建ち、山間部でも「住宅密集地」状態を呈する傾向がある。平坦な土地に限られている山間部の集落で人家が密集状態になるのはある意味自然ではあるが、スイスなどでは斜面に家を建て、各戸の間にスペースを取り、プライバシーを確保するための工夫がなされている。たとえばモントルー (Montreux) の東 50 キロに位置するプレツェ村 (Pletsche) は戸数約 40 戸の小さな集落で、標高 2,763 メートルのアルブリストホルン山 (Albristhorn) の西斜面に位置している。村の中には近隣の集落とつながるグーテンブルネン通り (Gutenbrunnenstrasse) が蛇行しており、住宅はこの道路に沿うように整然と建ち並んでいる。ここでは山間地というハンディを逆手に取り、標高差を利用してプライバシーと眺望の確保のみならず火災時の類焼防止が同時に図れるよう街づくりが行われているようだ。



岐阜県白川郷



スイス連邦観光局提供

上の例のように、ヨーロッパでは1本の道路が集落の内部で九十九折になったり、既存の道路の背後に別の道路が新設されるなどしたのち、新しい建築は順次道路に沿って立ち並ぶことになるが、日本の村ではこのようなインフラ整備は容易になされず、住宅建設が先行し、乱雑な町並を構成してしまう。第4に、個々の住宅の敷地が狭く、田園地帯に所在していながら集落は「住宅密集地」となる場合が多い。第5に、今日では建築様式や建材が多様な上、建築規制も緩いため、建築の屋根や壁の色に統一がなく、村全体の景観がカオス状態となっているケースが目立つ。そしてそれは周囲の景観と融合しないばかりか、それを破壊するほどの煩わしい存在となっている。以上が日本の村里風景の特徴と言える。

#### 第4章 公共空間としての都市空間

20世紀に活躍したアメリカの都市史家ルイス・マンフォードによれば「都市とは街路」<sup>4</sup> ということになるし、それは同時に文明ということにもなる。実際、今から5000年前のモヘンジョダロでも矩形の都市づくりがされていた。町は南北に走る1本の道路と東西に走る2本の道路から構成され、道路で区切られた区画は一辺180メートルの正方形のブロックとなっていた。<sup>5</sup> そして3000年近く前の古代都市バビロンの街路は一直線に設計され、2500年前のギリシャ人ヒッポダモスは格子状の都市計画 (グリディロン・システム) 理論を発表し、ミレトスはこの理論にもとづいて建設されている。<sup>6</sup> そしてこの設計思想はローマに引き継がれ、「新植民市は方形の平面をしており、二つの大路が中央で交差していた」<sup>7</sup> のである。ウィーンもローマ帝国の軍事基地であった

## 日欧比較景観論

が、「城壁内部は、古代ローマ都市の構成法によって、東西と南北に幹線道路が走り、各街区の内部はさらにグリッド状に細分され、建物が整然と配置されていた・・・」と考えられる。<sup>8</sup> だがこの思想は帝国の崩壊とともに忘れられる。

そして数百年後、ルネサンスとの関わりは不明だが、同じ発想による町づくりがヨーロッパ各地ではじまった。フランスでは1220年から1350年にかけて300以上の新都市が建設されたが、<sup>9</sup> 1284年創設のモンパジエ（Montpazier）もそのひとつである。ここでは幅7.5メートルの道路が直交し、20の街区がつくられた。<sup>10</sup> また1330年代、スイスのノインキルヒでも4本の通りをはさみ、中央に役場と教会を配置した「幾何学的な計画都市」が建設された。<sup>11</sup>

そして17世紀、ルネサンスの円熟・普及により各地で「ローマ」が復活した。まずパリは、17世紀初頭においては木造ハーフティンバーの民家から構成される中世都市であった。だがアンリ4世の指揮のもとで、この世紀の後半には道路が拡幅・整備され、道路境界に沿って建築のファサードを連ねる近代都市への脱皮をはじめた。<sup>12</sup> そして1760年代には市壁を取り壊し、広い幅員の並木道が敷設され、<sup>13</sup> 1世紀のちにはナポレオン3世とジョルジュ・オスマンによる大改造が行われ、放射状の道路網と近代的な上下水道システムを備えた、世界に冠たる近代都市に発展した。

ロンドンも1666年の大火のち建築家クリストファー・レンの発案で中世的街区を近世的矩形街区に改良した。<sup>14</sup> より具体的には、100本以上の道路が拡幅され、高低差がなくなり、2本の道路が新設された。木造建築は禁止され、新設された高層建築の大半は様式が統一されたレンガ造りであった。その結果、18世紀のはじめには赤いレンガ造りと白い石造りの建物が道路に沿って立ち並ぶ「清潔で安全な都市」に生まれ変わった。<sup>15</sup>

ウィーンは壮麗なバロック建築が多数あることで知られているが、それらは「鋭角的な切妻屋根に特徴があった中世町家」と併存していた。近代都市としてのウィーンの出発は建築形態を規制する法規が制定され、宮廷建築家を中心とする都市美委員会が組織された18世紀後半以降になる。<sup>16</sup> そしてパリに遅れること1世紀、城壁が崩され、ウィーンは本格的に近代化する。

その結果が今日、われわれが目にする都市景観である。それをブレイクダウンすれば、街中に張り巡らされ街路、その街路に沿って立ち並ぶ堅牢で長大な建築群、そして随所に配置された公園や広場となる。そして重要なことは、これらがひとつの巨大なセット、システムとなって機能し、美しい景観を構成していることであり、このシステム構築には3世紀以上の準備が必要であったことである。

上述したように、フランスでは早くも17世紀に都市計画や標準設計思想、建築の高度制限、道路と建築との有機的関連性、統一景観などが思考され、徐々に街づくりに生かされてきた。イギリスでも同じような発想がなされ、建築の不燃化と建築様式の統一が図られた。オーストリアでは1世紀遅れとなるが、「都市美」が議論され、実現されるようになった。これらを一言でいえば、景観の公共性ということになる。ヨーロッパ人は都市の景観は「みんな」のもの、公共のもので、個人の所有や利用に任せるべきではないと考えてきたのである。かれらは個人主義の信奉者であるが、建築は地権者が好き勝手にできるものとは考えていない。



ストラスブール



オフエンブルク（独）

なぜならそれは私有財産であると同時に、それが街の景観の一部を構成する以上「公共財」であるからだ。

フランスでは建築に対する基準が自治体毎に決まっている。だからこの国では、よその町に一步踏み入れると、どこの町にもない特徴が見事な調和をもって輝いている。それは整然とした町並みである・・・個性を主張するフランス人ではあるが、町づくり、家づくりの外観部分の統一だけは了解しているらしい。ここプロヴァンスのヴィトルルでは家の高さは四メートルまで、外壁の色はベージュなどなど、一万ページに及ぶ都市建築法があって、それには毎日のように修正が加えられる。<sup>17</sup>

上の引用は住宅地に関するものであるが、都市の中心部においては規制がはるかに厳しくなることはいうまでもない。繰り返しになるが、フランスでは1607年の勅令で、「道路境界に沿って建物のファサードを連ねる建築線（アリーニュマン）が定められ、

今日の確認申請の原型である建築許可の制度もこの時点で確立された・・・以降、街路沿いに高さやボリュームが一様の景観が生み出されていく根拠となった・・・」<sup>18</sup>のである。17世紀当時のパリではまだ高層の近代建築はなかったが、3～4階建ての木造集合住宅は層をなしていた。そしてここでファサードを合わせることは低層建築（民家）の禁止を意味した。実際、今日のパリはもちろん、ロンドンでもローマでも、ヨーロッパの主要都市に民家は存在しない。都市内の住宅はすべて高層集合住宅（アパート）で、商店やオフィスはその1階に設置される。狭い敷地に建つ民家は単に景観を損なうだけではなく、土地利用のうえでも非効率きわまりなく、この点でも都市空間の公共性を侵害することになる。ヨーロッパの都市景観はこのような「エゴ」を憎み、排斥した歴史のうえに成立しているのである。しかしその結果、個々の建築も都市全体も資産価値と美しい景観を保ち、世界中から観光客を惹きつけ、国家財政に大きな貢献をなすにいたっている。

他方、日本の都市景観はこれと著しい対称を示している。条里制にもとづいて建設された古代の奈良と京都にくわえ、江戸期に建設された城下町も入念な設計の所産であり、システマチックな道路によって街割りが行われ、私権の行使は厳しく制約され、都市は公権力が支配する「公共」空間で、そこは秩序美が支配した。問題は明治の近代化で、それまで調和を保っていた都市景観が一気に破壊され、行きあたりばったりの街づくりが行われたことである。ヨーロッパでは300年かけて中世都市から近代都市への改造がなされたが、日本ではそれは1世紀の時間も取らなかった。そのため近代化は部分的でしかなく、中世、否、古代から続く居住様式である民家が大量に都市空間に留まることになった。さらに、徳川期には厳格をきわめた建築規制が取り除かれたのち、公共空間意識が育つ間もないまま建築は野放し状態となり、地権者が好き勝手に建物をつくるのが容認され、街並はカオス状態となった。民家の隣にペンシルビルが建ち、その隣に高層ビルが建つという状態で、秩序や調和、美といった概念からはほど遠い空間が出現した。そして何より驚くべき事実は、東京の最都心ともいべき丸の内地区に依然として2013年現在、商店なのか倉庫なのか不明だが、10棟の木造建築が残っていることである。<sup>19</sup>「日本の顔」ですらこのような状態なので地方都市の「近代化」はまだ緒についたばかりといえるかもしれない。たとえば名古屋駅の周辺では超高層ビルが林立する一方で、数百の民家がいまだ健在で、超高層、高層、低層、超低層の建築が乱立し、デコボコの都市景観を呈している。



パリ



東京人形町

## 第5章 美観

ヨーロッパの都市で目立つものは並木で、控えめなものは広告である。そして皆無というべきものは第1章で言及したが電柱・電線である。パリでは1760年から76年にかけて町の防護壁が撤去され、「・・・その跡地が広い幅員と並木をともなった『大街道』に造り替えられた」が、この並木道を「プールヴァール」という。そして並木には機能があった。それは馬車と歩行者の分離、車道と歩道との分離という役割であった。<sup>20</sup>今日のパリでは裏通りにも歩道が設置されているが、これは一朝一夕にできたわけではない。フランス革命のころ庶民は貴族やブチブルが利用する馬車の脅威にさらされていた。<sup>21</sup>はたしてルイ14世の耳に平民の苦情が届いたどうかは不明だが、馬車の普及にともない交通事故が多発し、権力者の側でもこれを無視することができなくなっていたようだ。その後、ナポレオン3世のパリ大改造において並木道は街路設計の基本アイテムとなった。<sup>22</sup>

そして看板に関しては、その規制は2世紀以上も前に遡る。『一八世紀パリ生活誌』の作者によれば、看板を建築の壁面に貼り付ける政令が出されたのは革命依然のことであった。以降「・・・町はいわば垢抜けた、清潔な、ひげをきれいに剃った顔のような感じがする」ようになったのである。<sup>23</sup>また送電システムに関しては次のような興味深い指摘がある。明治がはじまったばかりの1873年、岩倉具視を団長とする使節団が欧米主要国を訪れたさい、かれらは近代化されたパリの下水道を見学した。「底には石が敷きつめられ、周囲は大きな弧状の洞となっていた。高さは身の丈の一倍半、壁には上水管や電線が結架され、このトンネル

## 日欧比較景観論

内に張りめぐらされている」<sup>24</sup> ということだ。当時、まだ電灯は一般に普及してはいなかったが、電信は広く用いられており、そのためのケーブルが路上ではなく、地中に埋設されていたというのは驚きである。使節団は、「この下水道は一八五〇年、ナポレオン三世の創意で、七千五百万『フランク』の費用で造られたという」記述を残している。<sup>25</sup> 当時の大国フランスは、潤沢な財力をこのようなインフラ整備に惜しみなく投資したようだが、人はここに深慮遠謀、「国家百年の計」の模範例を見ることができ



パリの並木道



電柱・電線のないすっきりした街路

日本の都市景観は基本的にはすべてと逆である。まず目立つのは電柱・電線と派手な看板・広告塔、そして路上の自販機であろう。そして不足しているのは並木や公園の緑である。バブル時代、多くの日本人は日本が世界一裕福な国だと盲信し、「元気があった」。この当時、有り余る国富を使って電柱・電線を地下に埋設すべきとの主張が新聞に掲載されたことがあったが、そのご主だった変化はほとんど感じられないし、どこの都市でも主要駅の「一等地」を除けば電柱・電線が空を覆っていることには変わりはない。そしてビルの屋上や壁面に無遠慮に設置された大小・多様な看板がこの国固有の景観を形づくっている。「伝統」や「観光」を売りにしている自治体の中には広告規制を実施しているところもあるが、この種の取り組みは「点」でしかなく「面」としての広がりは見られない。樹木についても同様のことがいえる。日本人は四季を愛でるとか、自然を愛すると自称しているわりには都市の緑は少ない。その主因は並木道が少ないことと公園が少ないことだ。そして奇妙なことは、並木道があるにもかかわらず、秋の紅葉を待たずして行政の手で大胆な剪定が実施され、樹木は「電信柱」と化してしまうのである。住民から落ち葉の苦情が寄せられるというのが剪定の理由である。何とも情けない話である。上の写真から明らかなことは、パリ市民はマンションの前に木があっても、日照の妨げになるとか、落ち葉の処理に困るとか「エゴ」を主張しないことである。もしそうなら、写真のマロニエは日本の並木のように「電信柱」にされてしまっているはずである。近代化を急いだ日本では、緑の効用、公共空間に緑がある至福がいまだ十分に理解されていないようだが、その結果が「異常に暑い」日本の夏として災いしているように思われる。



東京恵比寿



岐阜市



## 第6章 郊外風景

繰り返しになるが、ヨーロッパでは都市の住民は中世以来、高層の集合住宅に居住してきた。都市とは人口集約型の居住空間である。また多くの都市は城壁に囲まれ、おのずと市域が限られていた。近代に至り、国民国家が形成されて治安上、国(市)防上の懸念がなくなり、市壁が撤去されたのちも市域が極端に拡大することはなく、都市の周囲には豊かな自然が残った。だが産業革命の結果、都市の環境と風紀の悪化を理由に中産階級が市外に住居を求める現象が生じた。はじめは週末を過ごす別荘地のような場所が本格的な住宅地になっていった。今日、ロンドンでもパリでもベルリンでも、ヨーロッパの主要都市は、広い敷地をもつ無数の邸宅によって取り囲まれている。視点を変えて都市の中心から見ると、この住宅地域はあたかも森のように見える。産業革命はイギリスではじまり、イギリス人は最初に環境悪化を経験したがゆえに、その対策——中産階級の郊外への疎開——もまた世界初であった。<sup>26</sup> そして同じことが大陸でも起こった。これを物語るエピソードをひとつ紹介すると、19世紀後半のフランスの裕福

な画家ギュスターヴ・カイユボット (Gustave Caillebotte) は、父親がパリ南東 20 キロに位置するイェール (Yerres) に建てた別荘で育ち、この地の風景を好んで描いた。当時パリに住む中産階級の中には都会の喧騒を嫌い、郊外の田園地帯に別荘を構える人が多かったことはカイユボットの作品からもうかがい知ることができる。そして彼はパリ北西 10 キロにあるアルジャントウイユ (Argenteuil) の光景も好んで描いたが、今日イェールもアルジャントウイユも緑豊かな戸建て住宅地となっている。しかしこれらはパリを取り巻く広大な住宅地のほんの一部に過ぎない。

ベルリンでも事情は同じで、中心から 10 キロ四方には緑豊かな戸建て住宅地が市を取り巻いている。図式的にいうなら、ヨーロッパの都市とは高層の集合住宅地と商業施設からなる中心市街地と、その外側に幅広く広がる、緑陰の濃い郊外住宅地の二層構造でできている。そして注目すべきことは、住宅は広い敷地の中に建てられるということである。ドイツ語に *Siedling* という言葉がある。『新アクセス独和辞典』(三修社)によれば「(都市近郊の庭のある)住宅地、団地」という意味だが、「庭のある」という点が肝要である。日本では「住宅」はもっぱら建物に主眼が置かれ、敷地の広さはあまり問題にならないが、ヨーロッパでは「広い、庭のある」敷地がない戸建て住宅は存在しない。住宅とは広い敷地とセットで成立する、というのがヨーロッパ人の常識である。もちろん広い敷地に建つ物件は高額となり、庶民には手が届かず、これを購入できるのは中産階級に限られる。ゆえに郊外＝中産階級の居住地という図式も成立する。早い話、貧乏人は戸建て住宅に住めないということになるが、中世以来ヨーロッパでは都市の住民は集合住宅に居住するというのが自然であったので、これに異を唱える主張は聞かれない。金持ちが郊外の庭付き戸建て住宅に住み、貧乏人が市内の集合住宅居住に甘んじなければならぬというのは、日本人の感覚では「不平等」、「不公平」ということになるかもしれない。実際、日本では都心の住宅地に家を構えることができない人々が、場末に、あるいは市外の「田舎」に戸建て住宅を建てることができた。だがそれが、潤いのない「果てしなき市街地」という景観を創造してしまったのである。問題は、戸建て住宅の取得が誰にも可能かどうかではなく、良好な生活環境、新鮮な大気と日照がすべての人に行き届くかどうかである。ヨーロッパ人はこの点での「平等」を優先させた。そして「新鮮な大気」は緑が前提である。産業革命の悪しき教訓からヨーロッパの都市が学んだことは、「都市の肺」としての公園の整備だが、上述したように街路樹、そして住宅敷地内の緑化も同時に推進された。その結果、たとえばベルリンの緑化率は 43% に達している。中日新聞のインタビューに対し、ドルトムント工科大学名誉教授のハンス・シュティマン氏は、「ベルリンの都市計画は一八六二年、現在の目抜き通り、ウンターデンリンデンを中心に区画をつくったのが始まり。一九〇〇年代初頭には、住宅には太陽・空気・光の三要素が不可欠として、アパートに中庭を取り入れるなどして緑化を進めてきた」と述べている。<sup>27</sup> 何はともあれ、市内にも十分な緑があるうえに、市街地の外により緑の豊かな



オフエンブルク (独)



横浜市

住宅地、郊外が広がっているのがヨーロッパのマクロな都市景観ということになる。

他方、日本の都市に欠落しているのが「郊外」である。都心から離れた場所としての「郊外」はどこにも存在するが、日本の場合それは都心部の延長でしかない。そして上述したように、日本では都心部においても民家が無数に存在し、都心の一部が住宅地となり、「郊外」となるという奇妙な現象すら起こっている。とはいえそこに建つ住宅は敷地いっぱい建てられおり、庭も樹木もない。1960年代以降、日本でも高層集合住宅が建設されるようになったが、当時の「住宅公団」の団地はもっぱら「郊外」に建設され、既成市街地の高層化、市域の拡大防止という方向には進まなかった。70年代以降、既成市街地に民間マンションや公営団地が多数建設されるようになったが、それは今日でも点でしかなく、面としての広がりを見せることはなかった。その間、狭小の民家は増大し続け、都市は拡大を余儀なくされ、周囲の田園(郊外)を破壊していった。その結果、隣接する都市の間で市街地が市境にまで及び、二つの市が事実上「合体」してしまうということが普遍化し、都市と都市との間がすべて建築物で覆われるようになってしまった。

ヨーロッパでは都心から電車で 10 分も移動すれば豊かな自然と触れ合うことができるのに、日本の都市、とりわけ関東以南の



## 日欧比較景観論

太平洋岸の都市においては、自然との触れ合いは容易ではない。都市行政の怠慢もさることながら、街路樹の落ち葉に対する苦情が象徴するように、日本では都市居住者の側にも自然に無関心、あるいはその価値を理解できない人が多く、いきおい殺風景な都市景観が出現することになったといえる。他方、ロンドンでは19世紀末には都市労働者の福祉向上とロンドンの肥大を防ぐため、職と住を提供する自立型衛星都市の建設運動が民間から起こり、1905年にロンドン北方50キロの田園地帯に最初の衛星都市「レッチワース田園都市」(Lechworth Garden City)が建設された。<sup>28</sup> 第二次大戦中には本格的にスプロール対策が議論され、1946年、農地と牧草地を保護する「グリーンベルト」構想が法制化され、市街地の外側20マイルから40マイル内の開発が禁止されるようになった。<sup>29</sup> それゆえロンドン市民は便利な都市生活を享受するとともに、そのストレスを癒してくれる自然をも身近にもつことができるようになったのである。その背景にはベルリンの場合と同様に、スプロールを防止し、身近に緑のある良好な都市環境を実現させたいとする行政の強い願望、先見の明があったといえる。

## 結論

江戸時代の日本は農業社会であり、かつまた市民生活が厳しく制約された「統制社会」でもあったが、これが景観には幸いした。街並みは統制され、自然は豊かであった。江戸は100万都市であったが、上野の山にも隅田川の対岸にも野趣が溢れていた。だが明治の近代化、「富国強兵」のスローガンとともにそんな鄙びた景観が破壊され、東京はいうまでもなく、日本中の都市とその周辺、はては山地の麓にいたるまでが市街地化していった。「西洋に追いつけ、追い越せ」はもっぱら軍力と経済力に限ったことで、西洋の精神、人間尊重の文化、ヒューマニズムはほとんど一顧だにされなかった。産業活動優先の政治は個人を疲弊させただけでなく、生活空間から太陽と新鮮な空気を奪い、河川を汚染した。その一方で、企業寄りの行政は醜悪な広告が都市空間の中で跋扈することを放置した。戦前、日本の軍力は西洋列強と肩を並べるほどに成長し、戦後その経済は「世界第2位」に達した。そして政治家と一部国民の間に「もはやヨーロッパから学ぶものはない」という傲慢不遜な風潮が見られた。しかし景観という視点から見る限り、日本の近代化の浅薄さは明白であり、街づくりの点ではまだヨーロッパから学ぶことは多い。高度成長期以降、大発展を遂げた企業や官庁が競って都心に美しい高層ビルを建てたが、その足元にはいまだに多数の貧弱な民家が残し、いびつでゴミした都市景観を示している。日本社会を多年にわたって観察してきたオランダ人ジャーナリスト、カレル・ヴァン・ウォルフレンは1994年に出版した著書の中で「富める国の貧しい人々」<sup>30</sup>というフレーズを用いて、日本社会の光と影をみごとに表現したが、この「光」と「影」はまさに超高層ビルと民家の対比という形で都市景観に象徴的に現れている。



東京大崎



東京新宿

さらに、日本は島国だが、現在どれほど自然状態の海岸、あるいは人が自由に立ち入れる海岸が残っているだろうか。ここでも太平洋岸という言葉繰り返さなければならないが、太平洋岸の海岸線の多くが産業用地になってしまい、コンクリートで覆われ、個人の立ち入りが禁止されている。われわれは、日本の富が自然の山河や海を犠牲にして得られたもの、「美しい日本」を代償にして得られたものであることをしっかり思い起こす必要がある。ヨーロッパ人は人間を取り巻く環境を公共のものと考え、風力発電設備も視界の外に設置されるほど公共空間の美観に敏感である。だがこの思想はまだ日本では広く受容されていない。日本の支配的価値観は「美」ではなく、「金」であり「モノ」である。海であれ山であれ、その一角を購入したり、借用した者(企業)はそれを自由に、かつ排他的に利用できると考えているし、法律もそれを容認している。都市空間にあっても同様で、地権者がいかに奇抜な色やデザインの建築を建てようが、目障りな広告塔を設置しようが、構造面で問題がなければ行政は当然のごとく建設許可を出す。そしてこれに対してあえて異論を主張する人も希である。他方、ヨーロッパには昔ながらの自然が今でも健在であるし、都市も基本構造は19世紀のままで、都市の建築制限は厳しい。それゆえにヨーロッパの都市は落ち着きと洗練さが備わり、「世界遺産」的価値を帯び、世界中の人を魅了している。日本が「先進国」、「文化大国」を外に向かって主張し、観光立国をめざすなら、

この歴史に裏打ちされたヨーロッパの都市経営と自然保護のノウハウを謙虚に、そして積極的に学び取るべきであろう。

注

1. エドワード・シルヴェスター・モース著、石川欣一訳『日本その日その日』、講談社学術文庫、2013年、p.207.
2. 佐々木晃彦著『南仏プロヴァンス物語』、丸善株式会社、1995年、p.I.
3. 「市町村別 下水道処理 人口普及率一覧 (H23年度末)」 [www.mlit.go.jp/common/000227275.pdf](http://www.mlit.go.jp/common/000227275.pdf)によれば、首都圏の千葉県でも、某市の下水道普及率はわずか13.0%である。また愛知県の某市のそれは18.9%、そして岐阜県某市のそれは8.7%である。
4. Lewis Mumford, *The City in History: Its Origin, Its Transformation, and Its Prospect*, Penguin Books, 1961
5. 材野博司著『都市の街割』、鹿島出版会、1989年 pp.40-41.
6. アーサー・コーン著、星野芳久訳『都市形成の歴史』、鹿島出版会、1968年、pp.52-69.
7. 同上、p.77.
8. 川向正人著『ウィーンの都市と建築 様式の回路を辿る』、丸善株式会社、1990年、p.12.
9. アーサー・コーン、p.117.
10. 材野、p.50.
11. 齊木崇人著『建築巡礼 34 スイスの住居・集落・街』、丸善株式会社、1994年 pp.55-56.
12. 三宅理一著『パリのグランドデザイン』、中公新書、2010年 pp.170-173.
13. 同上、p.174.
14. 材野、p.52.
15. Hugh Clout ed., *The Times London History Atlas*, Times Books, 1991, p.69.
16. 川向、p.59.
17. 佐々木、p.40.
18. 三宅、p.173.
19. 朝日新聞 2013年9月21日夕刊
20. 三宅、pp.174-177.
21. メルシエ著、原宏編訳『一八世紀パリ生活誌』、岩波文庫、1989年 pp.92-103; pp.118-120.
22. 三宅、p.178.
23. メルシエ、pp.154-126.
24. 田中彰著『明治維新と西洋文明——岩倉使節団は何を見たか——』、岩波新書、2008年、p.36.
25. 同上
26. 山田利一著『「郊外」復興——“緑の海”の住空間 サバービア文化論——』、春風社、2004年
27. 中日新聞、2009年11月17日夕刊
28. E・ハワード著、長素連訳、『明日の田園都市』、鹿島出版会、1968年、「著者の序論」
29. Hugh Clout、p.125.
30. カレル・ヴァン・ウォルフレン著、井上実訳『いまだ人間を幸福にしない日本というシステム』、角川ソフィア文庫、2012年、p.63.

(提出日 平成26年 1月 7日)